

匠林

SAKABAYASHI

隨筆特集



至高の陶醉



金刀比羅宮蔵 寛政6年(1794年)円山応挙 晩年の作(部分)

220余年の伝統の技が贅をつくした「煌」きらめき

讃岐の金毘羅酒として親しまれてきた金煌が、酒づくりの贅をつくりおくりた「純酒」煌。
金煌の歴史は今をさかのぼること三〇余年の寛政元年。当主八代目であった西野嘉右衛門が、金
星羅さんの薦めはじめた酒づくりがその第一歩。以来、金刀比羅宮のご神酒として栄誉をうけ、そ
の丹精こめた手づくりの味は、金毘羅詣の人々からもよく親しまれてきた。
「純酒」煌のえも言われぬ風味と心には、金煌の心意気と酒づくりのひびく神髄が細やかに
思っています。

真珠玉のやとく搗きあげ

水品のべとく研ぎすました酒造好適米(山田錦)

清酒造に便しているのは、酒造好適米の中から選りぬかれた最高の大粒米。これを丹念に高度精
白し酒の雑味等の原因となる外層部を削り、磨き、吸水のよい、粟粒よりやや大きい、玄米のわず
かす割はれの、まるで真珠
玉のようなだけの酒米
とする。これを、良質
の寒の水でくり返す
り返し研ぎすまし、本
格的な酒づくりの仕込
みへと移っていく。
昔から「麴二配三
造り」といわれいる
とおり複雑多岐にわたる
工程を熟達の手が一つに
つなげていく。杜氏は寒中夜も眠らず、我が子を育てるまに精魂をこめ、技の限りをくつして
低温でじっくりつくりあげる。
こうして、清酒のアルコール分、旨味を米けから造り出した、手づくりの微妙精緻な煌を誕生
させたのです。
芳醇なこく、口あたりの爽やかさ、喉ごしのよさ、まさに清酒の芸術品、この稀なる清酒煌を、
日本酒をこなく愛するみなさまにじっくりと味わいつくしていただきたい。

煌
金 陵
超特撰

税込
標準価格 10,800円 1.8L
5,400円 720ml

ラベル右下に記しております番号は、
一本一本責任をもって製造いたしました
品質の証し。ご入手いただいた
貴方さまだけの番号です。

西野金陵株式会社 香川県仲多度郡琴平町四六三 電話(〇八七)七三三 四三三
未成年者の飲酒は法律で禁じられています。紙類中や投函期の飲酒は禁じます。

涸林

SAKABAYASHI

隨筆特集



第90号

酒林

SAKABAYASHI

随筆特集



原稿料——文章を売ること

里山を盗む人たち

京都の歌枕

ほろ酔い詩歌紀行——佐藤春夫の酒

絵と文 黒百合

紫煙の祟り

身辺二題

古い本のなかから新しい発見

本法寺——夏目漱石ゆかりの寺——

池井優……4

高橋和島……6

安森敏隆……8

日高昭二……10

中西美子……12

杉本忠夫……13

内野潤子……15

宮地智子……17

志村有弘……19



雨の歌を探す 片岡義男 … 21

絵と文 ㊦ アパート 佐川毅彦 … 23

じょうずへた

上手下手 志村榮至 … 24

懶猫 山西靖彦 … 27

絵と文 ㊦ 日本にはないドイツの博物館 さかもと ふさ … 30

庭を眺めながら 永岡慶之助 … 31

名前 山本千明 … 33

季節の移ろいに心惹かれ 宮本富夫 … 35

方谷先生かく行ないき 借金返済篇 池田一貴 … 37

表紙・グラビア … 香川の家具

原稿料——文章を売るということ

池井 優

(慶應義塾大学名誉教授)



文明開化と活字文化

書いた文章が活字になって金銭的収入につながる。それが原稿料である。明治維新に伴う文明開化の風潮は、江戸時代の木版印刷に代わる活版印刷となり、活字文化を生み出していった。情報の大量複製と伝達のスピード化が可能になったのだ。明治五年の東京日日新聞（今日の毎日新聞）の創刊をはじめ日刊新聞、月刊雑誌の定期的な発行や本の刊行がはじまり、小説家、新聞記者や編集者が出現した。当然、小

説、評論、随筆など寄稿してくれる人材が求められる。明治七年頃、東京日日新聞の原稿料ははじめ二百字で五十銭であったが、後に首相となる高橋是清、犬養毅の二人に限って原稿の多寡にかかわらず、月々五十円が支給されていた。貧しかった樋口一葉は原稿料が入ると知って、家計を助けるため小説執筆を思い立ったという。「たけくらべ」は当初『文学界』の七回分載、四百字一枚三十銭であったが、森鷗外、幸田露伴が絶賛し、明治二十九年

四月、雑誌『文章倶楽部』に再掲載された時は一枚七十銭であった。ちなみに当時の公立小学校教員の初任給は八円であった。

明治時代も後半になると文豪夏目漱石が登場してくる。『ホトトギス』に連載した「吾輩は猫である」の第一回原稿料は四百字一枚十三円、「猫」の評判がよく、本来俳句と純粋な写生文の雑誌にもかかわらず、明治三十八年一月号は売り切れ、編集を担当していた高浜虚子は漱石の原稿料だけ十三円を十五円にして続編を依頼した。

大正から昭和へ、そして戦後の

読書ブームと出版ブーム

高速度輪転機と自動活字鑄造機の出現によって新聞の発行部数が飛躍的に増え、百万部を越える新聞も出現した。菊池寛が通俗小説「真珠夫人」を『東京日日新聞』の連載を開始したのは第一次大戦が終結した翌年大正九年のことであった。また週刊誌『サンデー毎日』、『週刊朝日』が創刊された

のは大正十一年、さらに昭和に入ると講談社が「安い、面白い、ためになる」をスローガンに『キング』、『講談倶楽部』、『少年倶楽部』など多くの月刊誌を発行し、また岩波書店、文藝春秋、新潮社など大手出版社も雑誌、文学書などをつぎつぎ刊行するようになった。当然流行作家は各誌で引つ張りだになった。昭和初期の作家の原稿料は七割が一枚二円から三円、最高の十円は芥川龍之介、谷崎潤一郎、永井荷風、菊池寛など十人内外であった。当時の小学校教員の初任給は四十五円であった。

昭和二十年、長かった戦争が終わり、世の中が落ち着くと読書ブーム、出版ブームが起った。日本の推理小説の歴史を変えたといわれる松本清張が『点と線』を日本交通公社（現JTB）発行の月刊誌『旅』に連載を開始したのは昭和三十二年のことであった。知名度のない雑誌に加え、松本が提案した題名は「縄」であった。「もう少し魅力的なタイトルになりません

か」編集長の要望で「点と線」に改め連載が始まった。地味な雑誌だけに連載中はあまり評判にならなかったが、この小説の面白さに目を付けたのが、光文社の編集者であった。「印税の半分は宣伝費にまわして構わない」との著者の意見もあって、『点と線』、『眼の壁』二冊同時発売「カッパノベルス」の五段抜き広告が朝日新聞朝刊の紙面を飾った。作戦は図に当り、二冊特に『点と線』大ベストセラーとなり、清張ブームのきっかけとなった。

流行作家がもつとも

恵まれていた時代とその後
昭和三十年代後半から四十年代前半にかけては作家が最も恵まれていた時代であった。月刊誌に連載を持てば車が買え、週刊誌に毎週連載することができれば家が建つといわれたほどであった。売れっ子の作家となれば、さまざまな収入がある。①原稿料―小説、コラム、エッセイなど月産三百枚（一枚一万円×三〇〇＝三〇〇万円）、

②印税―年三冊刊行（定価二千元×十％×三万部＝一八〇〇万円）、③著作料―作品の映画化、ドラマ化、一作につき百万円程度、④講演会―講演料一回五十万円、年五回程度、⑤文芸賞の選考委員などの謝礼…。

しかし流行作家になればそれに伴う悩みも生まれる。第一は締め切りに追われることだ。売れっ子になると週刊誌三本、月刊誌二本の連載に加え、連載でない単発も執筆しなければならぬ。第二は忙しくなるとテーマが枯渇し、新たな取材、資料点検の時間がなくなり、それが作品に反映する、③原稿を手書きの時代は過労、特に手を酷使するため書径となり執筆に影響する。多忙のあまり、編集者に材料を集めさせたり、ゴーストライターを使ったりして問題になったケースもある。活字離れが進み、新聞や本を読むひとびとが減り、ごく一部を除き原稿料で生活することが困難になった現在、作家は今後どのような道をたどるのであろうか。

里山を盗む人たち

高橋 和島

(作家・郷土史家)



夏櫨の小さな、赤い実は少し酸っぱく渋みはあるものの食べられる。子供の頃はよく口にしたものだが、昨今は手を出すこともなくなった。こんなものを大量に集めてどうするのだろうか。心疾しき者は饒舌になるのが相場。男は訊きもしないのに勝手にしゃべり出した。

「この山に貫いに来たのは十年ぶりだよ。いや十五年ぶりかな。ちよこつと貫っていくだけやからかまわんやろう」

市の山だけれど、一、二本手折ってゆくだけなら誰にも咎められまい。が、量が多すぎる。こちらが首を傾げると、男は言った。

「花屋と旅館やホテルへ持って行くと買ってくれるんで採りに来たんやけどさ、大したカネにはならんぜ。いやほんと、たわけらしゅうて言葉も出んようなぜ二にしかならんよ」

だから咎められることはないだろう、と同意を求めている口ぶりだ。まるで筋の通らない、身勝手な言い

六月初めのよく晴れた日、午前六時

に家を出たわたしは、一時間半ほどの林道歩きを日課にしている近くの里山

(標高三百メートル弱)へ向かった。

夏櫨(ツツジ科の落葉低木。初夏、

枝先に淡赤褐色で鐘形の小花を総状に下垂する)大辞林より。以下同)を伐り取っている男に出会ったのは三十分

ほど歩いたときだった。

前歯の欠けた、色黒のその男は、愛想笑いを浮かべて言った。

「こいつを少し貫いに来たよ」

手にした束のほか、四、五メートル先の林道脇に大人の腕で一抱えはあろうかと思われる大きな束が二つ置かれている。少しなどという量ではない。

分だったが、男はどこか憎めないところがある。それに多少盗られたくらいであちこちに生えている夏櫨は無くないだろう。

わたしは苦笑しただけで聞き流し、ここは市の職員がときどき見回りに来る。見つかったら怒られるよ——と脅すだけで済ませた。

この日出会ったのは夏櫨盗りだったが、春と秋の彼岸近くになると、きまつて出遇うのは櫨さかき（ツバキ科の常緑小高木。神事に用いる）、櫨しんみ（モクレン科の常緑小高木。ハナノキ、シキビ、マッコウギとも。仏前に供え、葉・樹皮から線香・抹香を作り、材は数珠などとする）盗りだ。

頬のこけた、その中年男と初めて遭ったとき、彼もまた、訊きもしないのに、手にした櫨の束を指差し勝手にしゃべり出した。

「おふくろの墓参りに行くんで、少し貰いに来たとかや」

足元の櫨の束の大きさを見れば嘘なのは明かだったが、当方、正義感の強

いほうではない上、周囲に人影のない林道で、余計なことを言つて相手を怒らせるのは賢明と思えない。黙つて頷くだけで済ませた。

わが家近くの花屋では櫨が二百円、櫨が三百円（いずれも国産もの一束の値段）で売られている。おふくろさまの墓参りをするはずの殊勝な中年男は結構な小遣い稼ぎをしているわけだ。

たらの木（ウコギ科の落葉低木。全体に鋭いとげがある）、こしあぶら（ウコギ科の落葉高木。葉は小葉五個から成る掌状複葉）の若芽とりもよく出遭う。

これはわたし自身も含む一般市民がむかしから春先の楽しみにしてきた山菜とりだ。「盗り」ではなく「採り」の文字を使うべきだろう。

たらやこしあぶらの若芽と若葉は天ぷらにすると実に旨い。地元の料亭や和食店へ行くと春先の季節料理として食わせてくれる。近くのスーパーマーケットでは結構な高値で売られているから、小遣い稼ぎに採っている人もい

るに違いない。しかし、彼らを咎め立てする声は聞かれない。

と言っても、採り方に問題がある場合は別だ。たとえば高木のこしあぶらの若芽は手の届きにくい高さにあるのが普通なので、枝を切り落したり、木そのものを切り倒す不埒な連中がいる。たらの木の場合も若芽だけを摘み採らず、枝や木ごと伐り取る輩がみられる。こうした連中は太い咎められるべき「盗人ぬすこ」ということになろう。

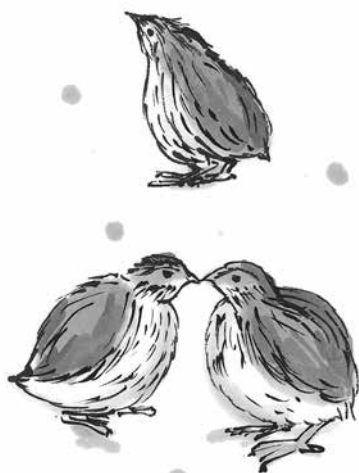
秋の栗拾いや茸とり、あるいはへボとり（スズメ蜂とり）も咎め立てされることはない。松茸を採っている人もいと聞かぬが、松茸が生えるのかどうかも疑わしい上、本人が決して事実を明かそうとしないので表立つて問題になることはない。

蝋をつかまえて漢方薬店へ、あるいは猪を罠で獲つてジビエ料理を売り物にする店に持ち込んでいる人がいるという話も聞かぬが、厄介ものを始末してくれるのだから、これも歓迎さえこそすれ、非難する声は出てこない。

京都の歌枕

安 森 敏 隆

(同志社女子大学教授
ポトナム短歌会代表)



五七五七七のこの形式は、「和歌」から「短歌」に変わるところで、おおよそ「歌枕」や「歌詞」を捨てて現代の「言葉」の日常性や肉声に賭けようとして苦悶した。その「歌枕」や「歌詞」は、捨てられたにも関わらず日本の風

土の中で、習慣や因習の中で言葉の根源に巣くっている言霊性^{ことばたま}を発揮して、今も革新されながら短歌のバックボーンを支えている。「歌枕」とは、「春の初めの歌枕霞たなびく吉野山」と『梁塵秘抄』でうた

われているごとく「地名」や「人名」を入れてうたい込まれているものである。

ことに「京都」の地と風俗は歌枕の宝庫である。「叡山」も「鴨川」も、そして「鞍馬」も「貴船」もたんな

る「歌枕」を越えて、永遠の「いのち」を宿すものとしてこれまで、積み重ねてうたわれている。「歌枕」の本来の意味は、宇宙的総体の「いのち」の根源をその歌枕に見、その土地や祖霊に永遠の「いのち」をお願いするところにある。「深草」は、深草の少将はじめ藤原俊成らが愛しうたい継がれてきた歌枕の根源である。秋の深草もよいが春・夏・冬の深草もまたよい。その「深草」を私は「わが庭」としてうたい「いのち」を新しく吹き込んでうたう。「一乗寺」も「丹波篠山」もみごとに現代の「いのち」を傾注してうたっていく。また兵庫の明石の「子午線」も現代の歌枕としてよみがえらせてうたうことができる。また大阪の「通天閣」も兵庫の「城崎」も新しく現代の文化の中心として、温泉街の中心としてよみがえらせてうたい、十年前から「城崎百人一首」も、企画し、毎年、城崎を、歌枕に五千首ばかり新しい歌枕がうたわれ、応募されてくる。

叡山も鴨川も何万年何十万年が

経つていよう 人は何年

(宮崎信義『千年』)

ふるさとはかへつて今は

一乗寺馬場町六番地にして曼殊院前

(国崎望久太郎『秋雪』)

狩衣かぎぬのうつら夢見しきぬぎぬに

鶉うすささやく秋の深草

(塚本邦雄『詞華美術館』)

鞍馬より貴船に至る山道を

遂に越えたり走り根を踏み

(神作光一『未来都市』)

俊成の坂をのぼりて住みつきぬ

わが深草野願成町がんじょうまちはや

(安森敏隆『百卒長』)

階段を二段跳びして上がりゆく

待ち合わせのなき北大路駅

(梅内美華子『横断歩道』
レブ・ラ・ソール)

荒神橋半ばの時雨君が死ののちも

つづける此の世の時間

(永田和宏『百万遍界限』)

深草をわが庭として歩みゆく

少将俊成式部とともに

(安森淑子『深草』)

大阪は尋常ぢやなくしやべるから

通天閣が蒸し上がります

(池田はるみ『ガーゼ』)

子午線を踏みて立つ塔よつびての

われ眠らせず煌煌と輝る

(池田敦子『子午線』)

地震なみのがれのちひとつでこし城崎

円山川岸黄の花が咲く

(石戸ハナ『城崎百人一首』)

現代の「歌枕」も、自己の「いのち」を同化させながら命脈を保つてうたわれている。まこと、よきかな、現代の歌枕たち。

ほろ酔い詩歌紀行 佐藤春夫の酒



日 高 昭 二

(神奈川大学教授)

酒を飲んで、いつまでも
何かくだらない議論をしやがった。
やつと寝たと思ったら
ひとり直ぐと怖ろしいいびきだ
ひとり又すばらしい歯ぎしりだ
これではまるでさつきの議論のつづ
きぢやないか

佐藤春夫は和歌山県新宮の生まれ。

慶応義塾を出て、詩人、小説家として
文壇の大御所となった。その彼が、三
田時代をふりかえったときの詩がいく
つか残されている。その一つ、「酒、
歌、煙草、また女」にこういう一節が
ある。

若き二十のころなれや
三年がほどはかよひしも
酒、歌、煙草、また女
外に学びしこともなし

春夫は三田に五年間在籍したが、一
度しか進級しなかったという。そうい
う彼が三田に進んだのは、当時、慶応

義塾に永井荷風が教鞭をとっていたか
らで、彼の存在のみが春夫を励ますよ
すになっていたと回想されている。

若い日の酒、煙草、女は、彼の時代
のみならず、多くの青年が青春を追想す
る際には不可欠な、いわば三種の神器
のようなものであろう。しかし、それ
らを仲立ちとした議論となると、春夫
ならずとも怨嗟や悔恨の種ともなるこ
とは、いつに変わらぬ風景でもあろう。

春夫の詩「浴泉消息」(『明星』大正
十一年九月)などをみると、そうした
事情の一端がよくうかがえる。とある
山中の温泉宿におけるひとこまである。

隣室の客は男ふたりだ。

ということにもなる。それでも私
は「浴泉」を続けているうちに、谷川
の水が自分の心に流れこんでくる。ま
た、ひとりぼっちの部屋へ月の光もさ
してきて、電燈を消したら「おれの目
から温泉がでたつけ」という諧謔的な
出来事ともなる。そこで私は、秋に
なったら花畑のある小さな家を持つと
思う。妻はいらないが、童児を置いて
住もうとも考える。詩人が夢見た理
想的な生活である。

その一方、春夫には、そうした諧謔
とともに厳しい自己省察のあけくれが
あって、彼の気分を容易に解放しない
という日常が続いてもいた。

明治四十四年四月の雑誌『スバル』

に載った詩「小曲二章」の一篇「病」には、そうした微妙な精神の機微が見てとれる。

うまれし国を恥づること。

古びし恋をなげくこと。

否定をいたくこのむこと。

あまりにわれを知れること。

盃とれば酔ぎめの

悲しさをまづ思ふこと。

これらが、みずからの「病」の数々のだと詩人は言う。「うまれし国を恥づること」と並んで「酔ぎめの悲しさ」を思うことが「病」の中に含まれているとは、いかにも諧謔の詩人にふさわしい。それゆえに詩人は、理想の境地を東洋的な詩魂との邂逅に求めている、それを巧みな日本語に移し換える作業を続けることにもなる。

いわゆる春夫における漢詩訳の試みである。そのいくつかをたどってみるだけでも、彼らの詩境に行き着きたいという春夫の思いは切実だ。たとえば

玄宗の時代、辺境の地にあった詩人「岑参」の詩「陣中の重陽に故園を思ひて」の一節とその春夫訳を引こう。

強欲登高去

無人送酒来

遙憐故園菊

応傍戰場開

高きに登り見んとはすれど

酒送り来人もあらなく

はるかに愛しむふるさとの菊

戦の庭のかたへに咲かん

言うまでもなく「重陽」は、九月九日に高い所に登って菊花の酒で宴を催す習俗である。しかし、酒を送り来る人もなく、遙かに故郷の菊の花を思う。見ればそれがこの戦場にそうて開いているというのである。

ついで「韓愈」の詩「酒把りて」の一節と春夫の訳。

擾擾馳名者

誰能一日閑
我来無伴侶
把酒對南山

ざわめかし名を追ふ輩

一日のゆとりだになく

伴はん人しあらねば

酒把りて山に對へる

「擾擾」は「じょうじょう」と読み、ざわざわとおのれの名前を売り歩く者の形容。そういう輩には、一日のゆとりさえ生まれるはずはない。私はここでは相手もないが、盃を手にな山に向かうという意味である。もとより、ここでの「把酒對南山」は、かの陶淵明の「飲酒」の中にみえる「菊を東籬の下に采り」「悠然として南山を見る」が踏まえられていよう。田園に院棲する詩人の面白を余すところなく表した有名な一句であるが、その詩境が春夫にまで及んでいるのである。

「酒、歌、煙草、また女」からの、はるかな時空を思わずにはいられない。

黒百合

中西美子



五月の半ばも過ぎたころ、なじみの花屋さんの片隅に黒百合を見つけました。なかなか珍しいものを見つけたと思いが深い求めました。濃赤紫をベースに濃青紫の網目状の筋が深みを与えています。遠目で見れば黒い花に見えます。

花言葉を調べると「恋・呪い」とありました。愛する人にそっと贈った黒百合を相手が手に取れば二人は、きつと結ばれるというアイヌの伝説があるそうです。

呪いというのはなんなのかと思ったら、富山県に黒百合伝説というものを見つけました。戦国時代の武将、佐々成政の側室小百合の物語です。成政は、美しい小百合を大変寵愛してはばかりませんでした。それに嫉妬の対象になった小百合が懐妊したとき、成政の留守の間に「小百合が密通している。お腹の子は成政の子ではない。」と噂が流れていました。成政は、これに烈火のごとく怒ったのです。

小百合を無惨に斬殺し、それだけでなく小百合の一族十八名全員の首をはねたということです。

小百合は死ぬとき「黒百合の花が咲いたとき、佐々家は滅亡する。」と呪いの言葉を残したということです。確かに薄暗い岩陰にこの花が咲いていたら気味悪いかも。でもこんなに可憐な花に恐ろしい伝説があるなんて驚きでした。

紫煙の祟り



杉本忠夫

(虎の門病院 内分泌代謝科
非常勤嘱託医)

タバコの紫煙には、最新のコンピュータグラフィックを駆使しても現わすことのできない、何にも代え難い魔力が秘められているようです。その魅力に取憑かれ喫煙を続けておられる方が多いかと思われます。

ところが、このローレライの歌姫の調べのような魅力的な紫煙には、虚血性心疾患の誘発、喫煙に関連した肺癌等の発症を助長するといわれております。これらの関連がいわれてから久し

くなります。しかしながら、喫煙を楽しんでおられる方がまだまだ多いようです。

また、喫煙している方は肺癌以外に喉頭癌（頭頸部の癌）、膀胱癌、泌尿器癌（膀胱癌、腎癌）等の発症の頻度が明らかに高くなることも判ってまいりました。

さらに、喫煙の弊害は、癌だけではなく、先ほどの循環器系の疾患にもおよんでおります。狭心症、心筋梗塞等

（虚血性心疾患）においても癌と同じように喫煙しない方より喫煙する方に発症しやすいことも明らかにされております。

約三〇年前にイギリスのロンドン医師会で、女性メンバーについて喫煙と寿命との関係について調査されたことがあります。

その結果、喫煙を楽しんでいた女性医師は五歳以上も寿命が短くなっていることが明らかにされました。その早

死に至った原因（死因）は狭心症、心筋梗塞によるとのことでした。

このデータが発表されてからは、愛煙家の女医メンバーは急速に減少したとのことでした。身に迫る、笑い話のような禁煙劇がありました。

医師は、さすが、意志が強いのでしょうか。狭心症が怖かったのでしょうか。とにかく、命を縮めないために禁煙されたようです。

喫煙は、高コレステロール血症、糖尿病などと並ぶ虚血性心疾患の大きな危険因子（リスクファクター）とされております。

そのため、循環器科専門医は喫煙については、非常に厳しく禁煙を指導しています。

狭心症、心筋梗塞など虚血性心疾患は、自覚症状や心電図で狭心症・心筋梗塞が疑われた場合は、冠動脈造影検査を行います。

狭心症では冠動脈造影検査で冠動脈の血流が今にも止まりそうな冠動脈の狭窄部位の確定診断を行います。

そして、この狭窄した冠動脈の部位に折り畳んで小さくしたステント（コイルバネ）を挿入留置します。留置されたステントがそのバネの広がる反発力で狭窄部位の血管壁を押し広げます。心筋梗塞では狭窄の部位に血栓が形成されていることが多いので、血栓除去術を行い閉塞していた冠動脈の血液を再還流させ血流を回復させます。

その後、冠動脈血行再建術を追加し、以降の生活に支障ないようにします。虚血性心疾患はこのように治療が非常に進歩し、日常診療に取り入れられております。

しかし、病状が軽減しても、また喫煙を再開すると狭心症が再発・憎悪してきます。したがって、循環器科の専門医は血行再建術後も厳しく禁煙を勧めております。

話は変わりますが、次に喫煙による肺癌などについてみてみましょう。

紫煙の魅力に取憑かれ、その喫煙で肺癌を発症し、肺癌の治療を受けられ方がその後、どのような経過になって

いるのか、関心のあるところです。

そこで、肺癌の外科的治療受けて初回の癌（一次原発癌）が根治されたあと、その後、新たな癌（二次原発癌）の発生がどのようになっているのかを明らかにした、興味深い研究が報告されております。すこしみてみましょう。

この研究は肺癌の治療後の一五〇〇〇人について調査研究がなされました。

一次原発癌の治療後、二次原発癌を発症した方は、喫煙のない方に比べて三倍から十一倍も喫煙していた方のほうが高いことが明らかになりました。

喫煙と関連しているといわれている癌は先述しましたように肺癌、膀胱癌、腎癌、頭頸部癌です。

このように、喫煙関連の原発癌は津波のように繰り返し命を脅かしてきます。

紫煙をくゆらせても癌、狭心症が誘発のない画期的なタバコが開発されるまでは、残念ながら喫煙はおあずけになります。